明治期に廃れた＜直訳―意訳―注釈＞式英語学習書の可能的工夫

藤　本　幸　伸

How to do with the Literal-Free Translations in Study Books in the Meiji era.

FUJIMOTO Yukinobu

(Received September 27, 2013)

拙論「英文訓読が拓いたもの」の最後に触れたように、漢文訓読を模した英文訓読が英語原文から独立すると、その訓読から原文の意味を解釈する作業は困難を極めることになる。漢文訓読は、漢文原文に返り点をつけて日本語化する強引な読み方だが、返り点以外の文字表記は原文と変わらず、それだけ原文の復元は容易で、原文に立ち返りながらの解釈が可能である。それに対し英文訓読の場合は、統語構造は言うに及ばず、自然権といった概念なども日本語とは大きく異なる上、当たり前だが英文訓読文に原文の英語は現れないとなれば、元の英文にどのような語が使われていたかを推測することは困難である。例えば individual に「個人」を、right に「権利」という漢語の訳語を当ててみたところで、自然権に相当する概念がない日本語話者には、その「個人」や「権利」が何を意味するのかは不分明であるに違いない。その上、無生物主語に代表される統語法や発想まで違うとなれば、英語原文の復元は曖昧とならざるを得ないし、ましてやその意味了解は摩訶不思議であろう。

英文の復元がいかに困難かは、実際の和訳とその原文を見れば明らかだ。「自分の夫も亦其事件に巻き込まれて居ること遂に彼女の知る所となりぬ」という和訳からどのような英文を復元できるだろうか。「遂に彼女の知る所となりぬ」は、At last she knew/realized the fact that...でも、At last it dawned on her that...あるいは It at last turned out to her that...でも表現できる。また、単語レベルの「其事件」も、accident/affair/case/event/incident と挙げればきりがなく、「事件」の類義語の数だけ可能性がある。

英文訓読のこのような原文復元の曖昧さは、漢文訓読と比較すれば、一目瞭然だろう。手元にある漢文参考書の「襄公は弟無知の弑する所と為り、無知も亦た人の殺す所と為る」という訓読文から「襄公為弟無知所弑、無知亦為人所殺」(『十八史略』) の原文の復元はさほどの困難を伴わないであろう。それは、「為、無知、弑、殺」に当たる漢字が日本語にあって、意味の理解が比較的容易だからだ。また漢文訓読の原文が短いことも大いに関係しているだろう。英文訓読でも「事件」くらいであれば、affair が「人間関係に絡んだ事件」、case が「警察の捜査対象となる事件」という違いはあるにせよ、その復元した英語語句間で意味理解に埋めがたいほどの差異は生じない。

しかし、英語原文と訳語との対応は語句レベルまでであって、「…知る所となりぬ」という少し大きな意味の塊になると、様々な表現の可能性が生まれ、原文復元は難しい。和訳の「知る所」は＜動詞＋形式名詞＞と名詞化表現であるが、英語では同じ意味を、know/realize などの動詞、attention/knowledge/notice/awareness など様々な名詞、また be aware/conscious などの形容詞と、品詞を横断して言い表すことが可能である。更にそれぞれの品詞に応じて文

法構造や文の構成も変えねばならず、knew か has known かといった時制の選択から、A catch her attention にして A という出来事が「際立っていたこと」を強調させるか、A come to her knowledge として必然性の意味合いを出すかといった文体の選択まで、表現の可能性は無数にあると言ってよい。英文訓読では、漢文訓読のように原文復元は容易ではないのだ。因みに、この英文と和訳は南日恒太郎『難問分類英文詳解』(明治36年) から取ったもので、元の英文は、At last it came to her knowledge that her husband was also involved in the affair. である (本文部6, 譯註部5)。

では、明治時代の英語学習者はどのようにして英語を学んでいったのだろうか。英語の学習書が質量共に変質し始める明治30〜40年代の状況を確認し、この時代に人気だった英文読解用参考書とその訳を検討していくことにする。明治20年代の英語学習書は、原文や注なしで漢文訓読調の訳文を掲載するものが主流であったが、明治30年代から<直訳—意訳—注>という「直訳」で英文の構造の理解を図り、「意訳」で内容理解を促進し、「注」で語句や慣用表現の知識を提供するという、時間をかけてゆっくりと理解していく自学自習型の参考書の原型とともに、英語に頻出する語句や表現を系統的に集めた、試験で効率よく点数を取る目的に作られた構文集の先駆けが誕生する。本稿では、この明治時代の学習参考書が凋落していった経緯と、<直訳—意訳—注>という語学学習の工夫が潜在的に持っていた可能性について、翻訳研究の観点から検討していくことにする。

1. 明治時代の英語学習書

英語学習書全般についてではないが、『日本の英学100年　明治編』によれば (358〜378)、明治時代の英語教科書は、その使用状況によって、舶載本時代 (明治初年〜18年頃)、翻刻本時代 (明治18年〜30年)、邦刊本時代 (明治30年以降) の三期に分けられる。舶載本時代は、その名の通り、海外から輸入した原書を使って授業を行った時期である。この時期によく使われていたのが、クワッケンボス (Quackenbos) やピネヲ (Pinneo) の英文典で、それを反映してか『英文典直訳』が次々と出版された。次の翻刻本時代では、輸入本ももちろん使われていたが、徐々に原書の翻刻本が出揃うようになる。「リードル」もしくは「リーダー」を冠する読本がそれに当たる。明治時代も30年が経った邦刊本時代になると、日本人の書いた英語学習書が出版されるようになる。『初等英文典』や『英文典講義』といった「英文典」を冠した学習書も依然として刊行されるが、翻訳本との区別をするためか、「英文典」ではなく『英文法講義』のように「英文法」を冠する刊行本が増えていく。

このような英語教科書の使用状況を参考にして、国立国会図書館の検索機能を利用して、明治時代に出版された英語学習書を書名別に検索してみた。検索語として選んだのは、「英文典・英文法」、「ナショナル」、「英文」である。明治初期は輸入本による英語学習が中心であることから、その輸入教科書の参考書が多いと想定できるので、「英文典・英文法」を検索語として選んだ。また、この検索結果から、「英文典」から「英文法」への移行時期も特定できる。「リードル」もしくは「リーダー」は明治期の英語学習の中心を成していた。よく知られているような、カタカナ表記の発音を冠した英文の下に訳語と訳す順番を示す番号が付され、その番号の順番に訳を並べていけば、曲がりなりにも日本語訳ができるような作りであった。この明治20年代前後の「リーダー」は、明治30年以降も、<直訳—意訳—註>といった工夫が凝らされた、「リードル」もしくは「リーダー」としてその命脈を保っていく。この「リーダー」の代表として「ナショナルリーダー」あるいは「ニューナショナルリーダー」を検索語とした。最後の

検索語「英文」だが、意外にも明治初期にはこの語を冠した学習書は少なく、明治30年を境として、「英文典・英文法」や「リーダー」の学習書と世代交替するかのように、出版件数が増えていく。このような書名別の出版件数から、明治時代の英語学習のありようを詳らかにできるとは言えないが、少なくとも大きな英語学習の傾向は見えてくるはずだ。学校制度の整備が進むにつれて、教育内容や学齢期も変化し、その変化が学習状況に反映されるので、正確に明治期の英語学習状況を把握するためには、膨大な資料調査を要することは贅言を俟たない。

表１　明治時代の英語学習書の書名別刊行数（国立国会図書館の検索機能を使って集計した。資料種別を図書と電子図書に限り、タイトルに検索語を含む図書の内、英語に関連するもの。）

	英文典	英文法	ナショナル	英文	教育関連史	その他
明治元年～5年	5	0	0	1	学制頒布	『学問のすすめ』
明治6年～10年	0	0	0	1	師範学校設立 東京大学開設 小学校数2万4225校	自由民権運動
明治11年～15年	0	0	0	0	教育令・改正教育令 中学校784校	『花柳春輪』（リットン）
明治16年～20年	**19**	**0**	**68**	**10**	帝国大学令 文官試験試補及見習規則	『民約訳解』鹿鳴館 『浮雲』
明治21年～25年	8	1	28	6	教育勅語 文官任用令	大日本帝国憲法『舞姫』
明治26年～30年	8	7	4	8	女子就学率40.59% 高等学校令公布	日清戦争 『たけくらべ』 『金色夜叉』
明治31年～35年	**21**	**5**	**23**	**30**	実業学校令公布（236校） 高校の総合試験制度	『武蔵野』 『巌窟王』（デュマ）
明治36年～40年	11	4	4	46	帝国大学2／高等学校7・専門学校50/ 実業専門学校13/ 高等師範学校2/ 女子高等師範学校1/ 臨時教員養成所5/ 実業教員養成所3　在学生4万1870	日露戦争 『吾輩は猫である』 『破戒』
明治41年～45年	6	13	6	55	高校入試総合試験廃止 義務教育就学率98% 大学・高専卒業生就職難	『蒲団』 「刺青」
出版件数	78	30	133	157		

この表から、明治16年から20年と明治31年から35年の二つの時期に英語学習は大きな変革を迎えたことが分かる。明治16年から20年の５年間の「ナショナルリーダー」あるいは「ニューナショナルリーダー」の発行件数68の内、41件が明治20年に集中しているのがこの時期の大きな特徴である。「英文典」も、その19件の内、12件が明治20年に集中し、「英文」を冠する学習書もこの時期に刊行数を増やしている。このよう英語学習書の急激な増加は、帝国大学を頂点とする学歴序列化をはかった明治19年の帝国大学令や、限定的ではあるが優秀な人材の登用を目指す明治20年の文官試験試補及見習規則と関係しているであろう。[1)]

次の大きな変化は明治31年から35年にやって来る。この時期まだ「英文法」を冠する学習書は少ないが、「英文典」という書名の日本人が日本人学習者のために執筆した英文法書が刊行されていた。そして一番大きな特徴は、明治期の英語学習を文字通り支えてきたとも言える「リードル」や「リーダー」の時代が終わりを迎え、それと世代交替するかのように「英文」を冠する学習書が一気に登場してくる。明治30年代は、竹内洋や江利川春雄らの精緻で行き届いた研究がその実態を明らかにしているように、いわゆる受験時代にあたる。そして、英語学習書の書名に変化が現れることからも想像できるように、英語学習書は、それまでの時間をかけ納得しながら英語を学ぶ自学自習型から短期間で効率よく受験に対策する成果型の学習に大きく舵を切っていくことになる。

次に「英文」を冠する英語学習書のおもだった書名を確認する前に、英語学習書と明治期の日本語文体との関係を簡単に振り返っておきたい。明治期の英語学習書の訳は、時代を下るに従って漢文訓読体から口語文へと変化していく。明治期の日本語文体と英語学習書の日本語訳とは、翻訳研究の観点から言っても、重要な関連性を否定できない。さて明治20年ころまでの文体は、福澤諭吉の『学問のすすめ』や中江兆民の『民約訳解』に代表されるように、漢文訓読体を基本とし、『花柳春話』のような翻訳も、漢文訓読体で訳されていた。明治20年代に入り、擬古文調の『舞姫』『たけくらべ』、「である」体の『金色夜叉』、そして、いわゆる言文一致体と言われる『浮雲』といった新しい時代に相応しい表現を求めて、明治期の表現者たちは様々な文体練習を展開していった。そして明治30年に入り、文体練習の成果は、ほぼ今日の日本語と変わらない文体で書かれる『武蔵野』、『吾輩は猫である』や『破戒』に結実していく。このような明治期の文体と即応するように、『巌窟王』に代表される翻訳を始めとして、英語学習書の日本語訳も変化していくことになる。英語学習書の日本語訳は、極小的な問題に見えるかもしれないが、日本語の文体形成過程にしっかりと結びついていることは明らかであろう。[2)]

考えてみれば当たり前だが、教育と国家の政策とは緊密な関係にある。明治政府が優秀な人材育成するために学校制度を整備していなければ、学校教育は存在しない、その意味では，学校教育は国家政策の一翼を担う。ところが、文学者や思想家の表現活動は、時には国家政策に異議申し立てをする方向に進む。中江兆民の民権論や夏目漱石の文学博士辞退はその一例だろう。英語学習書の日本語訳は、このように相殺しかねないベクトルが奇妙にも出会う地点と言えるだろう。優秀な人材を選抜する手段として英語の試験が課されるとすれば、英語学習書の日本語訳は、優秀さの指標のひとつとして機能していたはずだ。日本語訳とは言え、言葉である限り、表現活動のひとつに違いない。英語学習書の日本語訳が逸脱を許さない一律の日本語訳をよしとするか、原文の意味を伝える限りは，ある程度の自由を認めるかは、優秀さの尺度如何によって変わる可能性がある。その意味で、英語学習書の訳文の検討は侮れないだろう。

2.「英文」学習書の登場

ひとまず、「英文」学習書の書名を確認しておこう。

表2　「英文」を冠するおもだった英語学習書（国立国会図書館の検索機能を使って集計した。資料種別を図書と電子図書に限り、タイトルに「英文」を含む図書の内、英語に関連するもの。）

	書　　名	執　筆　者	書　　肆	頁　数
明治30年	英文試験問題答案：附・英学の栞	香川初太郎	東京：武蔵屋	108, 55p
	英文註釈	増田藤之助	東京：東京専門学校	245p
明治31年	英文和訳例題集	井上歌郎	東京：山本鐐蔵	138p
	最近英文傑作集	井上十吉	東京：成美堂	
明治32年	受験必携英文和訳五千題．第1巻	磯辺弥一郎	東京：国民英学会	94p
明治33年	和文英訳・英文和訳・英文入学試験問題答案	青木義教	東京：誠之堂	69p
明治34年	荒磯（コナン・ドイル 著）	山県五十雄 訳註	東京：内外出版協会	
	英文和訳難問詳解：文法指針付：文部検定英語科試験問題解答	イーストレーキ，越山平三郎	大阪：積善館	166p
	受験応用英文類例詳解	越山平三郎	東京：金刺芳流堂	46, 75, 19p
明治35年	英文逸話集	勝俣銓吉郎	東京：ABC 出版社	140p
	学生必携英文難句詳解	石沢光三	大阪：浜本明昇堂	120p
	新撰英文難句集	隈部富良	東京：三省堂	19, 138p
	漂流者と野蛮人（ダニエル・デュフォー 著）	河島敬蔵 註釈	大阪：浜本明昇堂	55, 44p
明治36年	英文解釈法	梅沢寿郎	東京：大日本図書	73p
	英文和訳公式：附・英語便覧	高野巽	東京：小川尚栄堂	144p
	英文和訳独練習	中学英語研究会	東京：宝文館	70, 34p
	難問分類英文詳解	南日恒太郎 著；神田乃武 閲	東京：ABC 出版社	121, 104p
	婿選び（チャールス・ヂッケンス 著）	山県五十雄 訳註	東京：内外出版協会	
明治38年	英文解釈法	南日恒太郎 著；神田乃武 閲	東京：有朋堂	112, 154p
	英文佳句難句集：新撰分類	村田祐治，二木要	東京：園屋書店	2冊 (102, 117p)
	西洋浦嶋物語：英文註解（ワシントン・アービング 著）	堀越岩松（晩翠）	東京：盛文堂	49p
明治39年	新撰英文難句詳解	田村左衛士	東京：三省堂	87, 61p
	中等英文和訳一千題．前編	磯辺弥一郎	東京：国民英学会	63p
明治40年	英文難句通解	花輪虎太郎	東京：新英語社	149p
	英文和訳法・和文英訳法	佐伯好郎	東京：金刺芳流堂	301p
	出世暦（ベンジャミン・フランクリン 著）	菅野徳助，奈倉次郎 訳註	東京：三省堂	91p
	中等英文難句集	隈部富良	東京：武蔵屋	140p
明治41年	英文解説：比較研究	清水起正	東京：門部書店	195p

明治41年	英文難句集	京都法政大学 編	東京：金港堂	170, 36p
	英文訳解法	高橋五郎	東京：同文館	372p
	英文和訳入学試験問題はどんなのがよく出るか	彩雲閣編輯局 編	東京：彩雲閣	99p
明治42年	英文解釈法：新式分類	日高只一 著	東京：東山堂	83, 113p
	新撰英文和訳義解	山口造酒，佐藤虎之助 著	東京：杉本書房	216, 75p
	註解英文和訳辞典	融道玄	東京：東華堂	192, 375, 58p
明治43年	英文自修叢書．第1－3編	村田祐治 訳註	東京：昭文堂	3冊 (65, 72, 61p)
	英文和訳独習	花輪虎太郎	東京：内田老鶴圃	190p
明治44年	英文解釈模範	伝法久太郎，間崎勝義	東京：興文社	92, 69p
	擬試験問題集：英文和訳・和文英訳	山口造酒，今西嘉蔵	東京：明誠館	122p
明治45年	英文解釋研究	山崎貞	東京：英語研究社	
	英文五百題	佐川春水	東京：中興館書店	92p
	英文和訳法	上島喜徳	東京：修心堂	88p
	受験本位英文和訳問題の解き方	藤井素	東京：宝永館	259p

明治30年の『英文試験問題答案：附・英学の栞』を筆頭に、これ以降受験のための英語学習書が質量共に、それまでの「リードル」や「リーダー」を圧倒するようになる。ここに挙げた学習書は一部に過ぎないが、「英文」を冠する学習書が、「和訳」や「受験」それに「難問・難句」「分類」という試験問題対策を如実に示す書名を冠していることがよく分かるであろうし、「解釈」という言葉が「英文解釈」として受験対策本の書名として使われ始めたことも確認できる。[3]「英文典」「英文法」それに「英文学」を除けば、「英文」という書名は受験用学習書を意味していたと言っても強ち間違いではないだろう。しかも、頁数も徐々に増える傾向にあった。

明治30年以降の英語学習書がすべて受験対策用であったというわけではない。「リードル」や「リーダー」系に属する、英語の語学的理解と文章理解の双方を目論む学習書もあった。コナン・ドイルの「荒磯」、チャールス・ヂッケンスの「婿選び」、ワシントン・アーヴィングの「西洋浦嶋物語」などがそうである。30～40頁の英文、注釈、そして訳文といった構成が主流だが、中には勝俣銓吉郎の『英文逸話集』のように、英文に詳しい側注を付しただけで和訳のない上級者用の読本もある。山崎貞が注釈と和訳をつけたコナン・ドイル「水底の王冠（The Musgrave Ritual)」は、明治42年では＜英文—注釈—訳文＞という構成であったのが、昭和２年になると＜左に英文、右に和訳、下に注釈＞という対訳本の構成を早くも取り始めている。[4] このような「リードル」や「リーダー」の衣鉢を継ぐ読本系学習書では、英語の語学的理解を養成するだけでなく、単文レベルの語学的分析では訓練できない、文章の中で英語表現の意図を探ったり作品世界の理解を促したりする本来の意味での「解釈」を目指していた。しかし、時間と忍耐を要するためか、効率のよい公式当て嵌め和訳法の勢いに押されてしまった感は否めない。[5]

3.「英文」学習書の中身

では、このような「英文」学習書は、どのような構成でどんな内容を英語学習者に提供していたのだろうか。まず、先にも英文を引用した南日恒太郎の『難問分類英文詳解』の構成、英文とその訳注を見ておこう。121頁の本文は、Part 1 NOUNS、Part 2 PRONOUNS、Part 3 ADJECTIVES、Part 4 VERBS、Part 5 ADVERBS、Part 6 PREPOSITIONS、Part 7 CONJUNCTIONS とほぼ品詞に分類し、その各パートを更に75のセクションに細分化しそれぞれのセクションに例文が10前後で、総数1189の英文を収録する。本文の英文には一切注釈はなく、ひたすら番号順に英文が並ぶ。この本文に104頁の訳注が続くのだが、セクション毎に簡潔な解説があるのみで、語句の意味解説は意外と少ない。今の受験参考書の原型と言われる英語学習書にしては、かなりあっさりした内容である。では、実際の英文とその譯註を見ていくことにするが、南日は２年後に「全編を通じて譯註共に舊版に比して更に正確詳密ならし」めた改訂版『英文解釋法』を出版する。両版の比較も兼ねて共通して収録されている例文と解説を見ておこう（旧版では759番78、改訂版では35番４）。

We cannot too much regret that such works of art should be destroyed. が、その例文である。この英文が旧版と改訂版でそれぞれどのような解説や訳が施されているかを確認しておこう。旧版では、「茲に集めたるは“too”に否定的の語伴うて「云々すぎると云うこと能はず、如何程云々しても尚足らざる程」と云う意を表すものなり“over”（=too much）の時も仝（おな）じ理なり」と簡単だが要を得た解説を施し、「此れ程の美術品を破壊し了（おわ）るとは慨歎の至りに堪えず」と訳している。

これが改訂版になると解説は一挙に詳しくなる。少し長くなるが全文を引用しておこう。

35　斯かる美術品が破壊せらるるとは如何に慨歎するも尚ほ足らず（慨歎の至りに堪えず）。

☞ (1) cannot too much regret—「慨歎し過ぐること能はず」「いかに慨歎すとも過度にはなり難し」「如何程慨歎するも尚ほ足らざるほどなり」。“cannot”に代ふるに“impossible”を以てし“too”に代ふるに“over”を以てするも其の意は常に同じ。(Cf. 665-669.) 例へば

We *cannot be too patient* in this world.

It is *impossible to be overpatient* in this world.

共に「此の世に在ては飽く迄も忍耐ならざるべからず」と云う意なり。

☞ (2) should be destroyed—意外又は慨歎の意を表すために斯く“should”を用ふ。(Cf. 386-388)

I am surprised that he *should say* so.

I am surprised that he *should have said* so.

I am sorry that he *should be* so sick.

I am sorry that he *should have been* so sick.　　(15　強調は原文のまま)

わずか２年で解説が詳しくなり、訳も口語体に近づける工夫を施すなどより利用者の便を図っている。ここで注意しておきたいのは、南日の英語学習書が、文法やイディオム表現といった文中心に解説をしているという点だ。南日の目論見は、単文に盛り込まれた、訳しにくいあるいは引っかかりやすい表現をいかに効率よく処理させるかにあって、複数の文からなる英語文章を、文章構成やレトリック、書き手の表現意図の観点から読み解かせることには関心がなかっ

た。南日の『英文解釋法』が「解釈」と銘打っていながら、解釈のあり方やその方法に触れず、もっぱら英語特有の表現の意味解説に焦点を当てていたことは、後の英文読解のあり方に大きな影を落とすことになる。

このような文中心の英語学習書は南日の『英文解釋法』だけではなく、『難問分類英文詳解』と同じ明治36年に発行された高野巽の『英文和譯公式』も同様であった。高野は、「英文中には其文の組織の相等しくして、同じ形式より成立つもの多し、是等は恰も、数學に於ける公式と同様にして、一度其の形式を知るときは、廣く應用する」ことができるとして、「普通の英文中に多く散見する」公式を集めたと，その序でいう。更にその公式に、「例題を附して實用を示したれば、讀者之によって得るの便少からざるべし」と、公式の有用性を自認していた。高野の解説を見ておこう。

True liberty cannot be too much valued.
此の“Cannot be…”は、
“幾何程…しても…過ぎない”
“幾何程…しても及ばぬ”
などの義にて、全文全體の意味は
眞の自由は幾何程尊んでも尊び切れない（尊び過ごすことは出来ない）
と云う義にて
自由は極めて尊きものなれば之を如何程尊ぶも決して尊び過ごすこと能はず
然るに稍々ともすれば、誤りて次の如く
眞正の自由は餘尊む能はず
と譯せば意味反對なり、注意して此の形式なる“Cannot be too…”の意味を記憶すべし（9）

この後、例題が４題、＜英文—意味と注意点＞という順で続き、「宜しく前記の如く譯すべし」(10) と「幾何程…しても…過ぎない」という訳し方に統一させようという目論見が見受けられる（因みに、この４題のうち２題は南日と同じ例文であり、試験問題の出典範囲が限られていた明治時代の様子が窺い知れる）。

このような文法項目やイディオムといった文中心の英文の読み方は、外山滋比古が言うように「訳ができあがれば能事終れりと安心してしまい、わからぬことは頬かむりして通り過ぎる。理解できていないまま解釈が完了したように考える」(63) ことになり、文法項目やイディオムの訳と「解釈を独立したものと認めることを妨げる。本当の理解を伴わない，語句だけの翻訳技術が独走するようになる」(64)。

書き手は自分の言いたいことを効果的に伝えるために、文章の中で様々な工夫を凝らすものだ。上記 We cannot too much regret that…というイディオム表現は、We really regret that…と単刀直入の言い方も出来るが、それでは物足りない、気持ちが伝わらないと書き手が考え、cannot too much regret といった持って回った言い方を選んで読み手の注意を引きつけて、自分の気持ちを説得的に伝えようとする書き手の工夫なのである。このイディオム表現の語学的な説明の一助として、「幾何程…しても…過ぎない」という訳し方を提示するのはいいが、このような訳が出来れば解釈も出来たと見なすと、「本当の理解を伴わない，語句だけの」訳出技術の独走となってしまうだろう。この例文も、文脈によっては「…とは遺憾だ・残念でならない・無念だ」と訳してもよいし、口語調であれば「…なんて悔しくてたまらない・返す返

すも悔しい」と訳すことも可能だろう。書き手は、この文脈でこのような表現をして、どのような思いを伝えようとしているのかを想像することが、文章を理解することであろう。書き手の表現意図を想像することは、更に書き手の世界観や価値観、あるいは偏見を理解することに繋がっていくはずであり、文章の解釈には欠かせない作業であるはずなのだ。

このように明治30年代に新しく登場した「英文」学習書は、受験に対応した学習書としては絶大に人気を博すことになるが、あくまでも文法項目やイディオムが含まれる文中心の解説に始終していたことを銘記しておこう。これが、後に「訳せるが意味が分からない」あるいは「長い文章は苦手だ」という読解力不足の嘆きの元凶となっていく。

4．読本系学習書の凋落

「英文」学習書が文法項目やイディオムが盛り込まれた単文中心の解説で、効率のよい受験対策を提供し、英語学習者の要求を満たしていくにつれ、明治時代の英語学習の主流とも言える「リードル」や「リーダー」を冠する英語学習書は凋落していくことになる。このような読本系の学習書が廃れていったひとつの理由として、その学習書の構成が挙げられる。「リードル」や「リーダー」は、まず＜直訳＞で英文の構造に沿った，つまり日本語としてはかなり無理のある訳文で大凡の理解をし、次の＜意訳＞で英文の内容とその文体を了解していく二段構えの構成をとっていた。それが、明治30年以降の「英文」学習書の詳しい解説に圧されてか、＜直訳―意訳＞の後に＜註＞の部を持ってきて、英語表現の解説を入れ始める。しかし、この「リードル」「リーダー」といった読本系の学習書は、物語や旅行記、そして詩文といったスタイル別の文章の並びで、文法項目やイディオムでまとまった「英文」学習書系のような系統性はない。そこが、受験時代に入った学習者にはもどかしく、廃れていったと推測できる。

では、まず明治22年の『意解挿入ニューナショナル第五讀本直譯』の直訳と意訳を見ておこう。フランスと戦っているプロシア軍兵士の父親から、「前線では野菜不足に悩まされる。自分の家のジャガイモが恋しい」という手紙が家族に届く。それを読んだ息子のフリッツが父親の元に新鮮なジャガイモを届けようと100マイルを超える旅に出る。その道中、親思いのフリッツに感動した大人たちから手助けを得ながら、遂に父親の所属する連隊に到着する。そこでも、フリッツの父親への純粋な想いに感動した将校が、それまでの軍功を称えて除隊命令と年金を発行するという粋な計らいをして、フリッツとともに父親を故郷に帰してやる。このような孝行息子フリッツの物語 “Soldier Fritz” から、その第６パラグラフを読んでみよう。フリッツは宿屋に到着すると、どうして子供がひとりで旅をしているのかと問う負傷した退役軍人に答える場面である（本書は漢字の他はカタカナ書きで、カタカナ書きの人名や地名と本文の区別が分かりづらいので、人名と地名以外はひらがなに換えてある）。

＜直＞「私はラインにまで行くべく願ふ」が答でありし。「私の父は昇進された而して軍曹である併しながら彼れは彼れが一の馬鈴薯を持たぬ間は其れに向て掛慮しなさぬ。夫故に私は或る者を彼れに荷ふべく願ふ而して最も良き者を選出した。此處に彼れ等が此の嚢の内にある」と（掛慮は「かいりょ」と読むか。「掛念（かいねん）」という熟語から、「気に掛かる」くらいの意味としておく）

＜意＞フリッツ答て曰く「私はライン河へ参る積もりでございます。私の父は此頃進級して軍曹と為りましたが其軍曹にては馬鈴薯を獲られぬ故其進級も一向忝（かたじけな）く思いませぬ。夫れ故私は父に馬鈴薯を進むる積もりにて極長い薯を撰抜き少し許り持参

致しました。其薯は其れ此の通り嚢の中に入ってございます」(4)

＜原文＞ “I wish to go to the Rhine,” was the answer. “My father has been promoted and he is a sergeant, but he doesn't care for that, so long as he has no potatoes. So I wish to carry him some, and have picked out the best. Here they are in this sack.” (34)

直訳は、英語原文との対応を重視したため、日本語としては読みにくくなっている。ほぼ逐語対応と言ってよいこの訳では、何となく分かっても，本当は何が言いたいのか分かったようで分からない焦れったさが残るだろう。それだからこそ意訳では、英語原文の内容を明快に伝える工夫を凝らして、「其軍曹にては馬鈴薯を獲られぬ故」と訳している。原文では he is a sergeant としか書いていないが、軍曹という低い階級とそれに見合った食事の質を汲み取って、「其軍曹にては」で「軍曹という低い身分では馬鈴薯すら思うように手に入らない」という文脈に沿った訳を与える。まだ英語学習が浸透する前の明治22年の、英文と対照しながらこの＜直訳—意訳＞を使って英語を学習していった段階では、＜直訳—意訳＞は有意義であった。

この同じ題材を、明治41年の『ナショナルリーダー第五譯讀解義』ではどのような扱いになっているのかを確認しておこう。明治22年の直訳にあったカタカナ書きが消え、代わりに直訳の中に英語が挿入されるようになる。明治22年の直訳と比べて、明治41年の直訳は格段に読みやすくなった。その分、意訳との差がはっきりしなくなっている。

【直】「私はライン河へ往かんと欲す、私の父は昇級せられた、而して軍曹である、併し彼は、彼が馬鈴薯を有せざる間は (so long as he has no potatoes)、其を意に介せず (doesn't care for that)。夫故に私は彼に若干を運ばんと欲し (wish to carry him some)，而して最良の物を撰んだ (have picked out the best)。此處に其が (they)「此嚢の中に在る」との答であった

【意】フリッヅ答へて「私はライン河へ行かんと欲す。私の父は此頃進級して軍曹と為れりと雖も、其嗜好する所の馬鈴薯を獲ざる間は、進級も彼を喜ばしむるに足らず。因て私は少し許り馬鈴薯を父の許に持て行かんと欲し、最良の薯を撰べり。即ち其れ此嚢に納め携えたるなり」と (4-5)

「行くべく願ふ」よりは「往かんと欲す」が、「彼れは彼れが一の馬鈴薯」よりも「彼が馬鈴薯を」の方が、また「或る者を彼れに荷ふべく願ふ」ではなく「彼に若干を運ばんと欲し」のほうがわかりやすい。明治41年の直訳は、明治22年の直訳よりも日本語として読みやすくなっている。ところが明治22年の「私の父は此頃進級して軍曹と為りましたが其軍曹にては馬鈴薯を獲られぬ故其進級も一向忝く思いませぬ」と比べて、明治41年の「私の父は此頃進級して軍曹と為れりと雖も、其嗜好する所の馬鈴薯を獲ざる間は、進級も彼を喜ばしむるに足らず」の方が英文の意味をより分かり易く伝えているとは言えないだろう。むしろ、明治41年の意訳「私はライン河へ行かんと欲す」は、明治22年の「私はライン河へ参る積もりでございます」をより直訳に近づけて訳しさえしている。なぜこのような逆転現象が起こったのだろうか。

明治41年の『ナショナルリーダー第五譯讀解義』は、＜直訳—意訳—註＞という三段構えの構成を取っている。この＜註＞で、例えば but he doesn' t care for that を、「身分は進級して軍曹と為りたれども、平素嗜好せる馬鈴薯を得ざる間は、位地の榮進も父は意に介して嬉し

とは思はず、即ち嗜好の良馬鈴薯を得て父の喜べるは、位地の榮進にも優る事甚し」との意にして doesn't care for that は「其軍曹に進級せるを意に介せず、何とも思はず」のように解説する。この＜註＞には、語学的な語句説明だけでなく、背景知識などの文化や言い換え表現など文章構成に関わる解説も含まれる。このような＜註＞は、明治22年の意訳が担っていた直訳では補えない英語原文の理解を促すという役割を果たしている。また、約20年間の学校教育の成果もあって、英語学習者は直訳の中に挿入された英語原文によって直訳と英語の対応が容易に分かるようになっていたのだろう。皮肉にも英語教育の進展が、意訳の存在意義を弱めていったと言える。英語教育の進歩は、語学的にも文化的にも詳しくなった＜註＞が、教授者側の語学的文化的知識の高さを示していることからも窺い知れる。

また、明治41年の段階では「と欲す、と為れりと雖も」という漢文訓読体で訳出する『ナショナルリーダー第五譯讀解義』の意訳は、あまりにも古めかしく映ったことも読本系学習書の衰退と関係しているだろう。明治30年代から、読本系の学習書でも訳文に口語文を採用しつつあったし、明治44年の「凡そ英文中に伏在せる一般公式の主なもの」を集めたという受験用学習書『英文解釈模範』では、「経済（の必要）はいくら淳々（ママ）と教えても教えすぎはない」（解答篇26）と大部分が口語文で訳されている。このように競合する英語学習書の日本文が口語文に移行している中で、劣勢に立たされている読本系学習書が未だに漢文訓読体を使い続けることは、あまりにも時代錯誤的と学習者に映って敬遠されても致し方ないであろう。

5．言語的思考様式と等価の観点から見た読本系学習書の可能的工夫

このように遅くとも明治40年代初頭には、明治英語研究の成果が盛り込まれた＜註＞によって英語構造の理解が進み、＜直訳—意訳＞と二段構えの訳出，特に＜意訳＞の意義が薄れてきていたと言えるだろう。事実、文法項目やイディオム表現の解説に詳しい「英文」学習書では、＜直訳—意訳＞と二段構えの訳出を採る必要はなく、補足説明を加えた訳文が中心となる。文法項目やイディオム表現を解説するに際して、解説中の訳文は＜直訳寄り＞の訳文になっていく。単文中心の説明がこの＜直訳寄り＞の訳文を可能にするのだが、この＜直訳寄り＞では不都合が生じる事態が起きる。その不都合は，複数の文からなる文章の理解の際、「訳しはしたが，何を言っているのか分からない」という形で現れてくる。

このような不都合の原因を外山滋比古は、中国から漢籍を移入する際、これを翻訳せず、原語原文に返り点を付けて、「原語原文のまま」を取り入れようとした漢文訓読に由来するという。漢籍でも返り点を付けるという語順交換の操作を施したように、英語の場合も、「センテンス内の語順だけは入れ替えないとまるで日本語の破壊になってしまう」ので、「語順交換方式をつくった。それが英文解釈法」であり、「原文忠実ということが至上要請」(82) になっていると言う。

> 語順にはこうして日英語の差異を認め、それに対する手当をするわけだが、それ以上の単位においては、日英語の差に目をふさいでしまっている。A, B, C, D, E と原文のセンテンスが並んでいると、訳文は A'，B'，C'，D'，E' とする。A'，B' …それぞれの内部では語順入れ換えが行われているから、こうして「文順」を原文に忠実に踏襲すると、ことばの流れが乱れ、逆流し、停止してしまう。…明治以来、思想、学術関係の翻訳はたいていが、こういう意味での逐語訳—語順は日本式に変わっているのだから逐語訳というのは当たらない、むしろ逐文訳とすべきか—逐文訳であるために、はなはだ生硬で難解なもの

になっていることは周知のとおりである。原文のほうがはるかによくわかるというのは常識のようになっている。訳文の日本語が拙いからではなく日本語らしい文順でないものになっているからであることが多いためである。(82-83)

外山滋比古も皮肉混じりに言うように、文中の語の順番の入れ替えには熱心だが、文と文の繋がりに無頓着であるため、「日本語らしい文順でない」「はなはだ生硬で難解なもの」が生まれる。文の中の語順については、明治初期から，英文の下に訳す順番を振って対応してきたが、文の順番に関しては、無為無策であったと言っているのだ。その外山は「楷書的読み」という読み方を提案し、新聞社の外報や外信部の仕事にその先駆的読み方を認めているが、「なるべく早く文順交換の基本方式を確立することが、日英語の比較にとって必須であるばかりでなく、広く英文の理解にも欠くべからざるもの」(89) と言う。それは、「日本語と英語の言語的思考様式、つまり、発想形式の特質は、単語とか成句といった小単位の比較ではなく、文順以上の、いわばシステム間の比較でないとはっきりさせられない」(90) からだ。外山にとって、この「文順交換の基本方式」、つまり「日本語と英語の言語的思考様式」の解明こそが課題であった。

この課題に答える英文の読み方あるいは考え方のひとつが、翻訳研究の等価という概念である。翻訳研究でいう等価は、語学的等価だけでなく、文化面や地政学的差異の中での等価の問題、更にはポストコロニアル批評の問題圏にも関わる広い概念である。この等価の概念を使って「文順交換の基本方式」の可能性を探ってみよう。題材とする英文は、明治41年の『ナショナルリーダー第五譯讀解義』の "Bee-Hunters" を使うことにする。まずは英文を読み、その後で＜直訳—意訳＞と＜註＞を見ておこう。次の文章は、現在の東ティモールで現地の人が蜂の巣を採取するのに同行していた A. R. ウォレス（ダーウィンと同じ時期に自然選択説を考えついた Alfred Russell Wallace (1823-1913)。本文は *The Malay Archipelago* の第13章 "Tomor" の最後から）の文章からの引用。自分たちの巣が攻撃されていると怒った蜂が人間たちに攻撃を仕掛ける。ウォレスは蜂の襲撃を逃れようとして半マイルも逃げたにもかかわらず刺されてしまうのに、現地の人は平気な顔をしている。その差はどこから来るのかを探る場面である。

> Several of them (=angry bees) followed me for at least half a mile, getting into my hair and persecuting me in a most determined way, so that I was more astonished than ever at <u>the immunity of the natives</u>.
>
> I am inclined to think that <u>slow and deliberate motion, and no attempt to escape</u>, are perhaps the best safeguards. A bee acting on <u>a passive native</u> behaves as it would on a tree or <u>other inanimate substance</u>, and does not attempt to sting. Still these men must often suffer and learn to <u>bear the pain impassively</u>, as without doing so no man could be a bee-hunter. (131強調は引用者)

複雑な文構造でもないので、理解に苦しむほどの文章ではない。しかし、the immunity of the natives や a passive native は訳すとなると、少し工夫が要りそうだ。『ナショナルリーダー第五譯讀解義』がどう訳しているのか気になるが、ひとまず文章の意味を確認しておこう。まず、現地の人が蜂の襲撃を受けても平気でいるのを the immunity of the natives と表現し、次の段落でその the immunity はどこに由来するのかを探っている。そして、その the

immunity の要因を slow and deliberate motion と no attempt to escape という不動性に見いだし、その現地人の不動なる様子を passive で表現する。更にこの現地人の不動性を樹木などの inanimate に喩えた上で、現地人は蜂に刺された痛みを impassively に堪え忍ぶという。このように現地人の the immunity の因って来たるところを書き手は推測していく。では、『ナショナルリーダー第五譯讀解義』がどのように訳しているかを見ておこう（今日では、差別と受け取られる表現を含むが、原文のまま引用した）。

【直】予は其土人等の被害なき事を以前よりも一層驚ろけり／予は遲徐にして落着きたる舉動と遁れんと企てざることが恐らくは最良の護身法なる事を思はんと欲す。受動的なる土人に止まれる蜂は其（蜂）が樹木又は他の無生物に對するが如くに舉動し螫（さ）さんとは為さず。然るもこれ等の人々は屡々無頓着に苦痛を蒙りて耐え忍ぶことを學ばざるを得ず、何となれば斯く為すことなくしては何人も蜂蝋夫と為ること能わざればなり

【意】予は土人の之に反して螫されざるを見て、極めて驚嘆せり／想うふに人の蜂に對するや、其舉動を遲徐愼重にして遁れんと企てざることこそ、却て最良の護身策なるべし。抵抗せざる土人の身に止まれる蜂の舉動は、猶ほ樹木、又は其他の無生物に止まれる時と同じく、之を螫さんと欲せざるなり。然れども、斯かる人々と雖も、往々此苦痛を蒙むりて、能く平然として之を耐え忍ぶことを習はざるべからず、何となれば、若し否（しか）らざるときは、何人も蜂蝋夫たること能はざるべければなり　（358-360　強調は引用者）

まず the immunity であるが、【直】では「被害なき事」とし、【意】ではそれを「螫されざる」と訳している。明治40年頃になると、『和訳英字彙』（明治24年）や『新訳英和辞典』（明治35年）といった日本人の手になる英語辞書も整備され、immunity の「（租税や公務の）免除、特免、自由」という意味は容易に知ることができた。しかしこの文章では、immunity を辞書的意味ではなく比喩的意味で使っている（＜註＞では「苦痛を課せられざる自由」という辞書的定義を与えている）。だから、筆者のウォレスも次の段落で比喩的に使った immunity という語の意味を説明しているのだ。『ナショナルリーダー第五譯讀解義』も immunity が比喩的に使われていることを理解していて、【直】で「（被害からの免除→）被害なき事」となるべく辞書の意味からずれない範囲で訳出し、【意】ではこの immunity という語の文脈の中での意味、「被害（＝蜂に刺されること）なき事→螫されざる」と読み解いている。翻訳研究の用語で言えば、原文（起点テクスト）の表現を辞書に記載されている訳語で訳し、その辞書の訳語から受け取る意味と原文の意味とがずれるとき（「免除や自由」と訳したとき）、辞書の訳語を離れて起点テクストと同じ価値を持つ表現を翻訳された文章（目標テクスト）に探して訳出する（「螫されざる」）ということになる。今の「英文」解釈系学習書ならば、さしずめ「痛みを逃れていること」といった訳をするだろう。このように考えると、明治期の英語学習書の方が、翻訳研究に沿った訳出法を採用していると言えるだろう。

ここで翻訳研究の等価（equivalence）という概念を簡単に説明しておこう。この等価は研究者によって、formal equivalence/dynamic equivalence（E. ナイダ）、overt equivalence/covert equivalence（J. ハウス）、foreignizing translation/domesticating translation（L. ヴェヌティ）などと異なる用語が使われ、またその強調点も違っている。研究者間で未だに決着の付かない厄介な概念ではあるが、どのように訳すのかを考える際の基準となるのがこの等価という考え方である。とは言え、例えば formal か dynamic かといった区別は、二者択一とい

うわけではなく、formal と dynamic を両極にしたスケールでどちら寄りに目盛りを寄せるかといった基準の取り方の問題である。この基準の取り方も，the immunity of the natives を例にとれば、「現地人の免除、自由」という辞書的訳語から「現地人の被害のないこと」という文脈の中での意味を汲み取って訳した場合、語のレベルで目標テクストよりに訳したことになる。句レベルで目標テクスト寄りに訳すと、名詞から動詞に読み解いて「現地人は痛みを感じないこと」と訳せる。文レベルでは、I am inclined to think that…を「私は、…と思おうとする」から「私が思うに…」に訳す場合がそれに当たる。更に、文を超えて文章のジャンルや目的（広告文と市報の違い、政治演説と百科事典の差など）によっても、スケールの目盛りの取り方は異なる。別の用語を使えば、翻訳する単位が、語か句か、あるいは文単位か、更に文章のジャンルや目的も含むかによって、起点テクスト寄りの翻訳かあるいは目標テクスト寄りの翻訳かが決まってくる。

更に等価という概念は、語学レベルだけでなく、文化面の考慮も要求する。例えば、1870年頃の文章の中の native という語を訳す場合、明治30年頃であれば、当時の辞書に掲載されている「土人、内国人」という訳語を使うことになるが、今では「現地人，現地の人」あるいは「ティモールの人」くらいには訳さなければ、政治的に正しいとは見なされない。目標文化の読み手がその語や表現から受け取るであろうイメージやニュアンスの等価への配慮も、翻訳する上で欠かせない要因である。このような文化面の考慮は、後に触れるポストコロニアルの問題圏とも関わり、翻訳のあり方を大きく左右する。起点文化と目標文化それぞれの価値観や世界観を考慮に入れ、その文化間での等価の問題を扱う翻訳理論に Polysystem や Descriptive Translation Studies や、翻訳する文書が起点文化で担う目的を目標文化で再現するために起点テクストの表現に必ずしも拘らないでよいとする Skopos という翻訳の考え方もある。また、目標テクスト・目標文化の方に目盛りを振った翻訳では、翻訳者の存在が顕在化してしまうという点も見落としてならないであろう。

では次に、受験用の「英文」学習書が扱わない「日本語と英語の言語的思考様式」という言語システム間の翻訳可能性をウォレスの文章で探っておく。そして最後に、外国の文章を自国語に翻訳することは、否応なくその外国の世界観や価値観をも翻訳することになり、必然的に翻訳にはポストコロニアル問題が絡むことになる。ウォレスの何気ない文章にも、ポストコロニアルの問題が潜んでいるのである。明治41年の『ナショナルリーダー第五譯讀解義』の訳文にポストコロニアル批評を求めるのは酷ではあるが、訳すという行為が単なる語学的な移し替えではないということを知るのは重要である。

英語のような音声中心の耳に訴える言語では、同音の言葉の反復は、耳障りで避けられる。これに対し、文字中心の視覚に訴える日本語では、たとえ“シセイ”と音声が同じでも、「姿勢、市政、施政、刺青、至誠」と漢字が違えば、同音の反復はそこまで嫌われない（因みに、手元の国語辞典には“シセイ”の同音異義語は15ある）。テクストの中で一貫した内容を様々な言い回しで表現する現象を cohesion と言うが、日本語はこの cohesion を元にして同一内容を多彩に表現するという言語システムではない。このような言語システムの違いにもかかわらず、原文忠実を至上とするため、英語原文で同一内容を指す異なった表現を日本語でも「忠実に」訳出してしまう。英語の cohesion 表現を日本語で「忠実に」翻訳すれば、高い確率で意味がずれる。このような言語システム間の発想転換を、単文中心の受験用「英文」学習書は扱うことをしなかった。その欠を埋めていたのが、読本系学習書であった。その処理の仕方を見ておこう。

上で見たように、蜂に刺されても平気な様を the immunity という語で表現し、その要因が slow and deliberate motion と no attempt to escape にあるとウォレスは考えた。そして、現地人を passive と形容し、更に inanimate に喩えさえする。現地人は passive で inanimate であるから、蜂に刺された痛みを耐える様も impassively ということになる。このように、英語原文が現地人を形容する言葉は一貫している。この読本系学習書は、まず【直】で「遲徐にして落着きたる→受動的なる→無頓着に…耐え忍ぶこと」と辞書的な異なる訳を当てて、原文忠実至上主義者を満足させる。しかしこの辞書的直訳から学習者は意味の関連性を掴めないと判断したのだろう、【意】で「遲徐愼重にして→（慌てふためかないので）抵抗せざる→（抵抗しないので）能く平然として…耐え忍ぶこと」のように意味の関連性を汲んだ訳出をする。この【直】から【意】への飛躍を可能にするのが、passive を「受動的なる、即ち、進んで逆はざる」、impassively を「痛苦を感ぜずに、平気で、又無頓着にて」と意味解説する【註】である。このように日本語と英語の異なる言語システム（つまり発想様式の違い）を考慮した英語学習を、読本系学習書は主導していたと言える。古めかしい日本語には目をつむって言えば、読本系の＜直訳—意訳—註＞という翻訳を利用した英語学習方法は、言語システムの差を比較学習するという点で有効な学習方法であったのだ。

しかし、翻訳が否応なくその外国の世界観や価値観をも翻訳してしまうという点からすれば、この読本系学習書には限界がある。もう一度表現の使われ方を見ておこう。immunity から、passive と inanimate を経て、impassively へという用語の流れを見ていると、ウォレスの東ティモールの人々への視線の偏りに気づく。*OED* によると、immunity の「免疫」という意味は1880年頃から使われるので、ウォレスはこの語を “freedom or exemption from anything evil or injurious” という意味で使っていた。ウォレスは、蜂に刺されることを evil or injurious と見なし、現地人が蜂に刺されても気にしないのは、現地人は evil or injurious と親和性があるからと考えたのかもしれない。また、passive は “readily yielding or submitting to external force or influence, or the will of another” という「主体性のなさ」を意味し、「邪なことや危険なことを回避しようとしない」という意味で否定的評価を伴う語であるし、inanimate はその字の如く「anima（=breath, life, mind, soul）を持たない」、魂や精神のない非人間を指す。impassive も “deficient, or void of, mental feeling or emotion” と人間性の一つである感情を持たないことを意味する。このように見てくると、ウォレスは、現地人は人間的ではないから蜂に刺されないし、刺されても痛みを感じないと暗に表現していることになり、当時のヨーロッパ人のアジア観が色濃く反映された言葉を無意識に使っていると言えるだろう。

このヨーロッパのアジア観をそのまま訳出すれば、その差別的視線を再生産することになり、暗にアジア蔑視に荷担することになる。このように原文が抱え込んでいる差別的な世界観や価値観をどこまで訳出すべきかが、ポストコロニアル翻訳理論が取り上げる問題群なのである。原文から離れるのを覚悟で目標文化の読者に原文の差別的アジア観をそれと分かるように前景化して訳出するか、あるいは原文に「忠実に」訳出するか。確かに原文のまま訳出するのが翻訳の本来の任務であるが、原文の差別的視線を顕示化せずに訳出することが、果たして目標言語の読み手に誠実であると言えるかどうかは疑問である。更にこの文章が一人称の語りであることが、問題を一層複雑にする。一人称の「私」が自己の差別的視線に批判的であることは、考えにくいからだ。

確かに読本系学習書の＜直訳—意訳—註釈＞の＜直訳＞はその役目を終えたかも知れない（そ

の意味では、「英文」学習書の直訳寄りの訳出も同じである)。しかし、単文解説中心の「英文」学習書や大意把握中心のリーディングが、言語システムや発想様式の違いあるいはポストコロニアル的問題に大きな関心を示さない状況では、読本系の＜注釈＞の意義は大きかったと言えるのではないだろうか。

注)

1） 明治20年の文官試験試補及見習規則は、国立公文書館デジタルアーカイブで確認することができる。明治22年の大日本帝国憲法によって、それまでの限定的な人材登用制度は廃され、すべての国民に官吏の道が開かれることになった。それは、明治26年の文官任用令と文官試験規則によって実現する。明治32年の文官任用令改正は、官吏の人事に政党の影響が及ばないようにするための法改正であった。

2）『日本の翻訳論』は、明治期の日本語文体と翻訳との関係を概観するのに便利である。本稿が主に扱う明治期の英語学習書でもある高橋五郎の『英文譯解法』(明治41年）が取り上げられている。高橋は翻訳を、初学者用の「逐字訳」、原文の構造を保ち無用の追加や改変を行わない「直訳、原文の構造に拘らない自由な「義訳（意訳)」の三種に分類し、「直訳」こそ「最上乗なる者と為さざる可らず」と断言する。それは、「翻訳の最大要件は先づ原文の精神（spirit）を深く究め、且其一般の口調及び特殊の観念を写し出し、且（此方の文法を傷つけざる限りは）及ぶだけ原文の文体を紙上に再現するに在る」(156　煩雑さを避けるため、引用文全体に付けられた強調点は省いた）からだと言う。更に解題を担当する長沼美香子は、外山正一や生田長江もまた「意訳」を廃して「直訳」を推奨していたと言うが (164)、高橋等が念頭に置く「直訳」は今の直訳よりも意訳に近いことは注意しておいてよいだろう。今日の直訳は、高橋のいう「逐字訳」に近い場合があり、同じ「直訳」を銘打ちながら中身が異なる場合がある。翻訳家の柴田耕太郎による伊藤和夫『英文解釈教室　改訂版』の日本語訳の検討を見れば、今日の直訳が逐字訳的だということが分かるだろう（http://www.wayaku.jp/study/study03.html)。

3） この「英文解釈」という語の組み合わせが受験対策用に使われることによって、英語学習の中での「解釈」の意味が変質してしまったことは否みようがない。『新潮国語辞典』によると「解釈」は、「①語句や事柄の意味を解きあかすこと。また、その説明。②芸術・言語などの表現の過程、またその結果を、自己の経験によって理解すること。」とある。訓詁学的もしくは文献学的な①の語義は、受験用英文解釈でも行われているが、②の「表現の過程、またその結果を、自己の経験によって理解する」作業は、受験用英文解釈では通常扱われない。受験用英文解釈本は、英文に頻出する（大抵は書き手の言いたいことを乗せる器に過ぎない）表現パターンを抜き出し、その典型的な訳し方を類例で練習させる。そこには書き手の表現意図をどのように読み取っていくのか、書き手はなぜそのような表現をするのかといった文体分析に通じるような問は発せられない。英語学習書での「解釈」は「公式に沿った和訳をすること」という意味に堕落してしまったのだろうか。

4） 英米の名だたる作家の作品を収録する研究社の『研究社新訳注双書』や南雲堂の『対訳現代作家シリーズ』などの対訳本は、翻訳では飽き足りないが、かといって原書に手を出すには力が足りない知的好奇心の強い学生にとって、廉価で世界の知を手に入れる絶好の場であった。このような対訳本で生き残っているのは、映画の台詞に訳と語句解説を付けた映画シナリオくらいではないだろうか。

5） 当時の英語学習書の広告文を見れば、「リードル」や「リーダー」といった読本系学習書と「英文」学習書が棲み分けていたことがはっきりと分かる。明治22年発行の『意解挿入ニューナショナル第五読本直訳』掲載された「ニューナショナル読本直訳」の広告文では、読本系学習書は「叮嚀ニ原文ノ疑問ニ就テ其答案ヲ示ス等主トシテ學生ヲシテ原文讀解ノ便ヲ得セシシムルヲ目的トシ」、原文を適正に読む読み方である「開發的ノ修養」を身につけさせるとある。これに対し、明治37年の『難問分類英文詳解』は、「比較的僅少の勞力を以て英文の眞髄を悟了し應用の力を養わし」める学習書で、「近來受験獨習用の書籍陸續として出づるも其最も効力あり且つ信頼すべき」ものというのが謳い文句であった。明治30年以降、効率を重視する受験用英語学習書が主流を占める中、「毎語毎句原文と對照し毎節に注釋を挿みて眞意義を詳解し其文法を評し其俗語を説き其他讀者の會得に苦む事項は盡く解説し内容の周到懇切なる蓋し無比の良書」（明治41年『ニューナショナル第五訳読解義』）という読本系の宣伝文句に如何程の魅力があろうか。

【参考文献】

江利川春雄 （2011）『受験英語と日本人　入試問題と参考書からみる英語学習史』 研究社

惣郷正明 （1983）『英語学び事始め』 朝日イブニングニュース社

（1984）『洋楽の系譜　江戸から明治へ』 研究社

高野巽 （1903）『英文和譯公式』 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

竹内洋 （1991）『立志・苦学・出世　受験生の社会史』 講談社現代新書

伝法久太郎・間崎勝義 （1911） 『英文解釈模範』 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

外山滋比古 （1980）『外国語の読みと創造』 研究社

南日恒太郎 （1903）『難問分類英文詳解』 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

（1905）『英文解釋法』 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

日本の英学100年編集部 （1968）『日本の英学100年　明治編』 研究社

藤本幸伸 （2012）「英文訓読が拓いたもの」『研究論叢　第62巻　第１部・第２部』 山口大学教育学部

元木貞雄 （1891）『意解挿入ニューナショナル第五讀本直譯（一ノ上）』 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

（1908）『ナショナルリーダー第五譯讀解義』 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

柳父章、水野均、長沼美香子　編 （2010）『日本の翻訳論　アンソロジーと解題』 法政大学出版局

山住正巳 （1987）『日本教育小史　近・現代』 岩波新書

Barnes' New National Readers. (1888) *New National Fifth Reader.* 国立国会図書館　近代デジタルライブラリー

Hatim, Basil and Jeremy Munday (2004) *Translation; An Advanced Resource Book.* London and New York: Routledge.

House, Julianne. (2009) *Translation.* Oxford: Oxford UP.